

私の一冊

こども学科 名倉 一美 先生

アーノルド・ローベル作 ; 三木卓訳 『ふたりはともだち』

小鹿図書館 726.5/L 77



主人公は「がまくん」と「かえるくん」の二人、彼らのユーモラスでほのぼのとした友情物語が5つ収録されている児童書である。中でも最後の「おてがみ」は、小学校2年生の国語の教科書に採用されていることもあり、多くの方がなじみ深い物語ではないだろうか。

職業柄、子ども向けの本に触れる機会が多いため、大人でも楽しめる児童書を紹介したいと考えたとき、最初に目にとまったのが、研究室の棚にあったこの本だった。ア

メリカの絵本作家アーノルド・ローベルが1970年に出版したこの傑作は、長年子どもたちに親しまれてきた児童書だが、私にとっても、ある子どものことを思い出す特別な一冊である。それは私がまだ大学院生だった頃、アルバイトで、支援を必要とする子どもと一緒に遊んだり勉強をしたりする仕事をしていた時、担当した子どもの一人が大好きだったのが、この本であった。表紙の「がまくん」と「かえるくん」の姿を見るたびに、二人で寝ころんで、この本と一緒に読んだことを思い出す。私が読む主人公たちのやりとりに、とても楽しそうに笑っていたその子は、実は、人と関わることに困難さを抱えていた。けれども、この絵本の「がまくん」と「かえるくん」のやりとりを、けらけらと笑いながら楽しそうにみている姿をみて、“ああ、この子は誰かと誰かが関わるのがこんなに楽しいのだ、相手と通じ合う気持ちをちゃんとわかっているんだ”、そんなことを教わったような気がした。

この本に収録されている「がまくん」と「かえるくん」の5つの物語は、一つ一つがとても短く、あっという間に読み終わってしまう。そこには大きな冒険があるわけでも、目を見張る展開があるわけでもない。ただ淡々と、二人の日常の中におこる小さな出来事が綴られているだけである。けれども、その話の一つ一つから、何とも言えない温かさが伝わってきて、いつの間にか二人のやりとりに引き込まれ、読み終わった後には思わず笑顔が浮かぶような、ほっこりとした気持ちが味わえる。これこそが、この本の持

つ魅力なのだと思う。ローベルの優しいタッチと色合いの絵も、そうした雰囲気醸し出しているのだろう。

この「がまくん」と「かえるくん」のやりとりを読むたびに、子どもの頃の、シンプルで素直な感覚が呼び起こされる。大人になるにつれ、いつの間にか人と人との関係性は複雑になる。気が合う人もいれば合わない人も出てくるが、それでもどうやって関係を築いていくかが重要になってくる。時には相手に対し、自分を隠したり演じたりもしながら、適度な距離感を測って関わるようになる。子どもの頃のように、ただ“大好きだからともだち！”とはいかなくなるのである。だからこそ、素直な気持ちそのままに関わり合う二人のやりとりには、どこかうらやましいくらいの、温かさや微笑ましさを感じるのだろう。

実はこの本を読むと、もう一つ思い出すことがある。今度は、私がまだ保育者だった頃、担任をしたある5歳の女の子からもらった手紙のことである。その子はたまたまその日、いつも一緒に遊んでいる仲良しのお友だちと、けんかをしてしまった。感受性の強いその子は、その時の気持ちを私に伝えたくて、幼い文字で一生懸命、手紙を書いたのだ。そこには、主に友だちと喧嘩をして悲しかったことが綴られていたが、最後に書いてあった一言が、今でも忘れられない。「・・・せんせい、〇〇ちゃんとまたあそびたいよ。ともだちっていいね。」・・・“ともだちっていいね”。この言葉を、当たり前前に素直に言える(書ける)子どもの心のまっすぐさに、仕事の忙しさや人間関係のあれこれ荒んでいた当時の私は、ハッと目を覚まさせられたような気がした。そして、今まで余裕のなかった自分を反省し、もう一度、子どもたちの生き生きと素直な感情を丁寧に受け止められるような、そんな保育をしようと誓ったのである。この本には、あの時あの子にもらった手紙と同じ、荒んだ心を癒してくれるような、温かいまっすぐさを感じる。

もしも、毎日の生活でちょっと心が疲れてしまい、周りに対して優しい気持ちが持てなくなっている時には、ぜひこの「がまくん」と「かえるくん」に会ってみることをお勧めしたい。どこか間抜けでちょっと自分勝手、けれどもチャーミングでなんだか憎めない、お互いへの素直な愛情に満ちたこの二人のやりとりを見ていると、それまでのとげとげした感情が、少しだけ丸く柔らかくなるような気がするだろう。そして、思わずつぶやきたくなるはずである。“ともだちっていいね！”